研究課題：ラーニング・コモンズの活用可能性に関する調査研究

ラーニング・コモンズは、複数の学生が集まって、電子情報資源も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする場を提供する（以下、ＬＣとする)。LC の要素は、物理的なリソース、アカデミックリソース、人的リソースからなるが、物理的・仮想的・文化的という三つの相互に関連し依存したレベルでコモンズが形成されている。

1．ラーニング・コモンズの整備状況

「平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」(2017)によれば、LC の設置率は平成 23 年度 33.9％から、平成 27 年度は 62.7%まで伸び、全国 779 大学のうち 482 大学が設置している。国立大学で 91.9%、公立大学では 51.7%、私立大学では 59.1%となっている。

2．国立大学調査

「国公立大学図書館のラーニング・コモンズ調査」によれば、LC における大学講義での利用状況は、ゼミナールでの利用が最も多い。LC の利点としては、「学生が集うことによる空間の活性化」や「入館者数、利用者数の増加」「多様な学習スタイルへの対応が可能」が挙げられている。国立大学図書館協会によれば、LC の目的には「主体的な学びを理解し，自立した学習活動を行う学生の養成」がある。特に、自立的な学習（主体的な学び）のために必要な学生のスキルとしては、学士力を構成する不可欠の力として、情報リテラシーとアカデミックスキル、そして、コミュニケーション能力・コミュニティ形成能力などのソーシャル・スキルが重視される。

各国立大学の実践例では、考動力や情報リテラシー、ライティング、アカデミックスキルズ、社会人基礎力などが目的とされている例がある。また、正課外のプロジェクト活動や、学部教育との連携が行われている。人的スタッフとしても、学生アシスタントや TA、ラーニングアドバイザー、留学生コンシェルジュなどによる支援例がみられた。

3．私立大学

私立大学の事例研究では、設置のために共通する背景として、学修環境の整備による教育の質的転換を目的とした戦略が伺えた。整備による支援は、①ICT 統合型の協調学習空間、②教育関連支援（アカデミック・IT)、③電子教室、④チューターによるライティングサポート、⑤FD のためのインストラクショナルサポート、⑥展示・イベント施設、⑦キャリア・地域社会との連携拠点、⑧教員と学生による正課・正課外の活動拠点、⑨国際交流・外国語支援、⑩リフレッシュエリア（カフェ・ラウンジ)、などから構成される。LC の設置により、学生たちが蓄積してきた「知」を共有し問題解決につなぐ創造的な学習空間が実現する。

設置場所は、図書館併設型と独立型に分かれる。後者の松山大学では、アクティブ・ラーニングスタジオにあたる演習教室から 200 人程度の ICT 教室までを備えた一棟立ての学舎となっている。ＬＣの効果についてアンケート調査を実施した同志社大学では、「ラーニング・コモンズを高頻度に利用する学生ほど、宿題や課題の遂行率や履修科目についてグループで学習する時間、そして授業外での学習時間が増えた」との結果を報告している。

4．公共図書館

地方自治体のラーニング・コモンズとして先駆的な県立長野図書館の事例研究を行った。2019 年にオープンした図書館は、「共知・共創」「図書館がまちをつくり、まちが図書館をつくる」場を設けることを目的としている。「つくる」「運営する」「利用する」が一体となった場づくりを目指し、何が起こってほしいのかを念頭に「メニュー選びのデザインから体験のデザインへ」を重視し、①異年齢・異世代の交流学習と創造、②居場所・地域活性化・連携、③過程重視の参画型学習が工夫されている。また、県立として、市町村のモデルになり、専門職員集団の育成と継続発展が図られている。